

作業療法教育における 集中的グループ経験の試み

富岡 詔子*
佐藤 陽子*
鈴木 孝治*
山本 朗*

はじめに

作業療法では、レクリエーション、集団作業（絵画、製作活動、生産的作業など）、サイコドラマ（心理劇）、集団での話しあい、など、様々な集団過程を障害者個人の変容のために利用することが多い。これらの臨床で、集団場面を治療集団として効果的に利用するためには、セラピストが集団の成立過程や発展過程に対する理解や知識を持つだけでなく、集団がメンバーの個人の行動や態度、情緒や考え方にどのような影響を与えるかといったグループダイナミックス^{1,3,5)}を、体験的に学習しておくことが不可欠である。

しかしながら、グループダイナミックスは、集団及びそのメンバーの行動に関する一般法則を明らかにすることを目的とする学際的な研究領域であり^{2,11)}、膨大な内容を基礎教育で学習していくことは、まず不可能であるといえる。また、近年グループダイナミックスの応用として、一般健康人を対象にした様々な体験グループ (experiential group) が、多くの研究所や研修機関、教育機関で実施されており^{12,14)}、卒後研修として利用出来る機会も増加してきている。これらはT-グループ、感受性訓練グループ、エンカウンターグループ、グループダイナミックスセミナーなど、様々な名称で呼ばれているが、いずれも個々のメンバーに及ぼす集団の影響力や、自分の行動が他のメンバーに及ぼす効果についての理解を深め、集団内コミュニケーションを促進する方法を集中的グループ経験 (intensive group experience) を通して体験的に学習することを狙いとしている^{4,7)}。またプログラムの実施形態も多種多様で、効果や方法論についての報告も多い^{9,11,15,16)}。

従って、作業療法の基礎教育においては、膨大かつ難解なグループダイナミックスの領域への導入として、グループ体験そのものを通して集団の流れや影響力を実感すること、そのうえで集団作業療法を実践する際の知識や技術を深めていくことの重要性を自らの体験と関連させて自覚し、継続的な卒後研修へとつなげて行くことが主たる目標といえよう。

今回、この目標を達成する一つの方法として、実践面では最も関連の深い精神障害作業療法学の基礎実習の一部として24時間の集中的グループ経験のプログラムを計画し実施した。グループがどのように展開したか、学生がグループをどのように体験したかに焦点を

* 信州大学医療技術短期大学部作業療法学科

当てて報告し、グループダイナミックスの導入としての、集中的グループ経験の利用法を検討してみた。

I 対 象

本学作業療法学科3年生11名（男性3，女性8）および男性教官2名がメンバーとして参加し、女性教官2名がファシリテーターの役割で参加した。メンバーの年齢は20歳から33歳で、平均年齢23，3歳である。この種のグループ体験はファシリテーター以外のはじめてである。

II 方 法

今回の調査では、まず24時間の集中的グループ経験を実施した。次いで、ビデオの録画からすべての発言を再現し、その内容からファシリテーターがグループ全体の流れを整理したものを、1ヶ月後のアフターミーティングで学生に報告し、さらに3ヶ月後にアンケート調査を実施するという、3段階の方法を用いたものである。それぞれの具体的な方法は次の通りである。

1. 集中的グループ経験の実施形態

① 日程：昭和60年7月16日－7月17日。セッションの時間的配分は図1の通りであり、50分毎に10分間の休憩をとった。A.M. 1：50－6：00は自由時間とし、メンバーは寝ても良いし、起きていて話合いを続けても良いとした。但し、ファシリテーター2人は起きているメンバーに対する役割を続行した。

② 場所

図2に示すように、本学の心理実験室を利用した。部屋には人数分の椅子は用意せず、

第1日	9:30	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	0:00
	オリエンテーション	第1セッション	第2セッション	昼食	第3セッション	第4セッション	第5セッション	第6セッション	夕食	第7セッション	第8セッション	第9セッション	第10セッション	第11セッション		
第2日	0:00	1:00	2:00	3:00	4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00					
	第12セッション	第13セッション	自由時間 セッション				第14セッション	朝食	第15セッション	第16セッション						

図1 集中的グループ経験 日程表

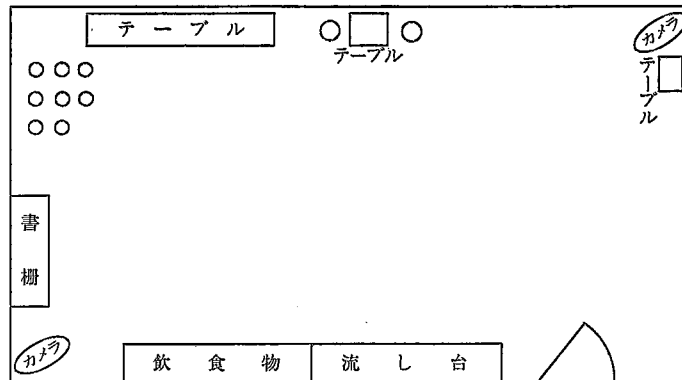


図2 心理実験室配置図

カーペットの上もしくはそこにある椅子に自由に座って貰い、飲物、スナック類をセルフサービス出来るように準備しておいた。毛布、枕、ざぶとんなどの持ちこみも自由にした。なお、この部屋の天井にビデオカメラ2台が設置されており、ビデオ収録されていることをあらかじめ伝えておいた。

③ オリエンテーション

集中的グループ経験を精神障害作業療法学の授業に含まれる基礎実習の一部として、成績評価とは無関係に実施することを、授業のコースアウトラインを説明するときにあらかじめ予告しておいた。具体的な説明は、第1セッション開始前に、日程、場所、教官の役割（誰がメンバーとして参加し、誰がファシリテーターの役割をとるかということ）、ビデオ収録すること、実習の目的（参加メンバー各自が自分についての理解を深め、メンバー相互の理解を深めるために、設定された場所と時間の中で言語を中心としたグループ体験をすること、その体験からグループダイナミックスを理解するてがかりをうること）、この実習は成績評価には含まれないこと、酒気帯び参加は禁止であること、グループの中で知り得た個人の秘密は守ることの8項目について行った。セッション開始時には、『これからグループ実習を始めます。ここは一種の文化的孤島だと思って下さい。ですから何を話してもいいし、どんなふうに話してもいいし、何を話題にしてもいいし、自由です。私と〇〇先生は、ファシリテーターの役割をとりますが、何か聞かれて質問に答えることもありますし、答えない時もあります。また、こちらから質問をすることもあります。自由にさせて貰います』というオリエンテーションを実施した。

④ ファシリテーターの役割

2人のファシリテーターのうち、授業担当責任者が主ファシリテーター（以下 Fac.）の役割を取り、オリエンテーションの実施をすること及びセッションの開始と終了を告げること、もう1名は副ファシリテーター（以下 Sub.）としてメンバーの役割を取ること、の形式的な分担を2人の間で前もって確認しておいた。セッション中は、それぞれがそのときの判断で、自由に発言し介入していくことにした。又、休憩時間中の打合せや連絡

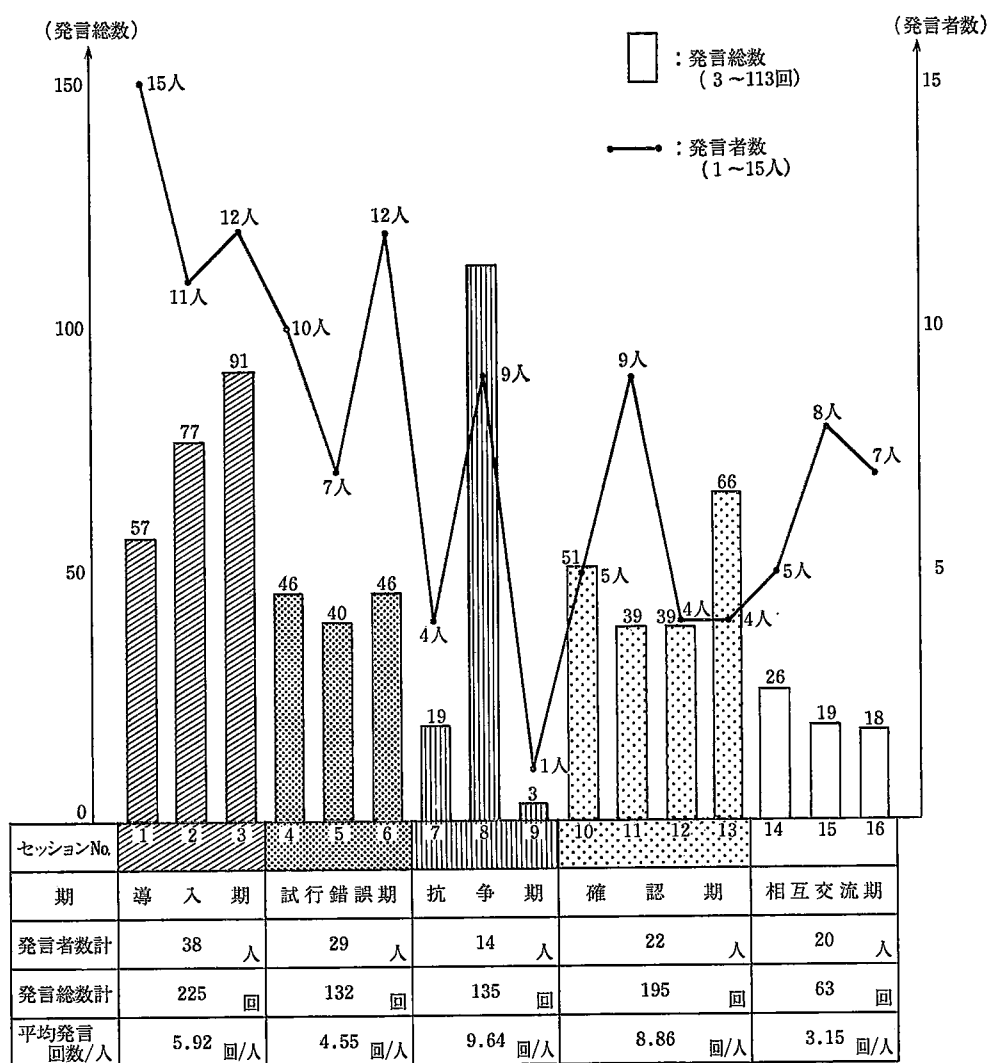


図3 各セッション毎の発言総数と発言者数

は意識的には行なわなかった。

2. アフターミーティングの実施

集中的グループ経験終了時に、今回の体験を整理するために、1ヶ月後に全員が集って、もう一度話しあいを持つことを予告しておいた。ファシリテーターがまとめた、グループの全体の流れを5期に分けて報告し、メンバーからの意見や感想を中心に話しあった。このときに、後日アンケート調査を実施する予定であること、グループの結果については纏めて発表したいので協力してほしいこと、結果についてはすべて学生に報告する予定であることを伝えておいた。

3. アンケートの調査の実施

集中的グループ経験を通して、集団の個人に対する影響力や集団における自己の行動や態度を学生自身が自己点検するてがかりとして、自己評価方式によるアンケート調査を3ヶ月後に実施した。調査内容は、集団の中の自分について、グループの参加前後を比較回答する10項目と、自分自身に対する見方の変化について、参加前後を比較回答する10項目、及び集中的グループ経験そのものに対する感想を選択回答する項目の3種類を含んでいる(別表)、集団内での自分自身についての回答項目は、関¹³⁾による、『討議事態における主我性—社会性の測定』を一部修正して利用した。他の回答項目は独自に作成したものである。

III 結 果

1. グループの経過

グループの経過は次の様なステップで纏めた。①ビデオから聞きとり可能な発言をすべて逐語的に文章化した。② Fac. が全員の発言の内容、方向性を吟味しながら、セッション毎に表現されたコミュニケーションの特徴を5種類に分類した。③共通するコミュニケーションの特徴を持つセッションでは、個人はグループの中でどのように行動してたのかを推測して、5期に分類した。④この原案を参加教官全員で検討し、最終的なグループの経過として整理した。⑤座席は録画で確認して再現し、発言回数は発言の長短に関係なく、発言者が交替するまでに言語化されたものを1回と数えた。⑥発言は、内容を損わないよう、又、各参加者のプライバシーの保持を配慮し、要約して表現した。⑦ Fac. と Subの発言は区別した。記載がないのはすべて Fac. の発言である。⑧AM 1:50—6:00の自由時間にみられた発言は、この経過をまとめる時の資料には含めなかった。これは、オリエンテーションで、場所には拘束されるがセッションに参加するしないは各自の自由とした為である。実際には大多数のメンバーが、自由時間である4時間10分のセッションを継続した。

グループの全体的な経過は、表1—1から表1—5に示した様に次の様な変化がみられた。

- ①第1期は導入期であり、形式的なコミュニケーションが主としてみられた。
- ②第2期は試行錯誤期であり、すれちがいコミュニケーションが主としてみられた。
- ③第3期は抗争期であり沈黙及び行動化によるコミュニケーションが主としてみられた。
- ④第4期は確認期であり、2方向のコミュニケーションが主としてみられた。
- ⑤第5期は相互交流期であり、今、ここでのコミュニケーション (here and now communication) が主としてみられた。

2. グループの各期毎の発言回数と発言者数

図3に示したように、各期に含まれる各セッションの発言総数(延数)と発言者数(同一発言者を一人とする)の総計の変化をみると次の様な傾向がみられた。尚、全期を平均した各期当たりの平均発言者数は24.6人、平均発言総数は、150回、発言者一人当たり

表1-1 グループの経過—第1期：導入期（形式的コミュニケーションの段階）

セッションNo.	座席状況	発言者と発言回数	グループの流れ	
			テーマの変化とメンバーの発言	ファシリテーターの発言と介入
1		A-2 B-9 C-2 D-3 E-2 F-2 G-4 H-13 I-1 J-4 K-4 S-1 Y-3 Fac.-5 Sub.-2 15名	<ul style="list-style-type: none"> 提案に沿って型どおりの自己紹介を全員が順番に行う。 Hが『唐突ですが…』と、子供の頃の遊びを話題にすることを提案する。 年の順、若い順とかの発言の順番をめぐるやりとりの後、暗黙の内に席順に沿って自分の子供時代の遊びを話して行く。 発言者への質問はほとんどでない。 	<ul style="list-style-type: none"> オリエンテーションの実施（方法の項参照）と、男性教官2名が学生と初対面の事もあって、簡単な自己紹介を提案する。
2		A-5 B-21 E-2 F-6 H-17 I-7 J-9 S-4 Y-1 Fac.-1 Sub.-4 11名 [沈黙 C, D, G, K 4名]	<ul style="list-style-type: none"> Fが前回のテーマを自分から話題にして、子供時代の遊びを話しはじめる。 BがJに『どんなふうに子供を育てたいの』と、話題の変更を試みるがJは『突然かわっちゃって』と取上げず、再び遊びの話に戻る。 5分間の沈黙の後、Hが『中学校の制服はどんなだった』と話題を変更し、2-3人のメンバーがHに司会される形で、自分の経験を話す、時間切れで途中で終わる。 	<ul style="list-style-type: none"> Sub. が、第1セッションでの話題提供者であるHに、『なにが知りたかったの』と質問する。
		A-4 B-9 D-1 E-3 F-3 H-10 I-5 J-21 S-1 Y-2	<ul style="list-style-type: none"> Hがグループは『何のためにやるのか』の質問を Sub. に向ける。 J, Fからも同じ質問が Sub. に向けられる。 	<ul style="list-style-type: none"> Fac. が開始直後の10分間、急用で不在。 Sub. はオリエンテーションを再確

3		<p>Fac.-13 Sub.-19 12名</p> <p>〔沈黙 C, G, K 3名〕</p>	<ul style="list-style-type: none"> • Hが男性教官2人に『グループの経験があるかどうか』を尋ねる。 • 教官メンバーがHの質問に順に答える。 • Jが再びグループの目的や意味を Fac. に質問する。 • 話しやすい場にするにはどうしたら良いか、テーマをきめたほうが良いのかどうか。授業の一部だから堅苦しく考えてしまうことなどが、J, F, B, A, D, から散発的に話題となる。 • Jが『じゃあ、話題を出しますか、結婚したらどういう家庭を作るか…。だれか…』と提案する。B, E, A, J, I, Hが自分の理想や漠然としたイメージを話し始め、再び会話がはずむ。 	<p>認することで、質問に答える。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Sub. は教官メンバーの呼び方に付いての違和感を話題にする。 • Fac. が入室し、『今なにが話題になっているのか、どなたか説明してくれますか』とグループに問掛ける。 • Fac. は、Jがグループにどのような期待を持っていたかを尋ね、そのへんの気持ちを皆さんで話しあってみて下さいとグループに返す。 • Fac. はこのグループでの出来事は成績評価とは無関係であることを再確認する。 • 第1, 第2セッションの話題提供者であったHに『沈黙が窮屈だったんですか』と、そのときの気持ちを尋ねる。
---	--	---	---	---

表1-2 グループの経過—第2期：試行錯誤期（すれちがいコミュニケーションの段階）

セッションNo.	座席状況	発言者と発言回数	グループの流れ	
			テーマの変化とメンバーの発言	ファシリテーターの発言と介入
4		A-1 B-8 D-4 F-4 H-3 I-1 J-2 Y-6 Fac.-12 Sub.-5 10名 [沈黙 C, E, G, K, S 5名]	<ul style="list-style-type: none"> 『始めます』の合図があっても、休憩時間からの雑談が続いている。 Fが前回のテーマ『結婚について』、『自分の世界をもてる結婚が最高』と話し始める。 Fは『自分にいいかせている、自分の考えを皆にいつている』と応答する。 F ↔ Y ↔ B ↔ Sub. ↔ H ↔ D ↔ A ↔ I ↔ H ↔ J ↔ Bと、2-3人のメンバー間で家を継ぐこと、親の期待などのテーマで会話が継続するも、時間ぎれで中断となる。 	<ul style="list-style-type: none"> 『声が良くききとれないんですが…』 Fへ何を話したいのかを質問する。 『ここにいる皆に話しているんですね』、『皆に分かって貰いたい』と確認する。 Sub. がBへ“家の事情で結婚出来ない…云々で……自分はずるいと思う”の発言は、かっこつけた発言なのかどうかを質問する。
5		B-11 D-2 F-6 H-3 I-2 Fac.-10 Sub.-6 7名 [沈黙 A, C, E, G, J K, S, Y, 8名]	<ul style="list-style-type: none"> 前回発言の途中で時間ぎれになったBが『家の事情についてはこれ以上公の場では話す必要は無いと思う』と発言する。Sub. Fac. Bのやりとりが続き、沈黙が断続的に生じる。 Fが『沈黙で困ってしまう、この場をなんとかしたいがどうして良いか分からない』と発言し、D, Hが『沈黙の時に何を考えていたか話そう』と応ずるが、他のメンバーからの発言は無い。 Fが『どうして良いか分からない』と泣き出す。 	<ul style="list-style-type: none"> Fの気持を明確化し、『他の人に分かって貰えたという実感がありますか』と質問する。 『Fさんは……今悲しいような気持ちですか』

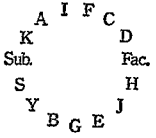
6		<p>A-1 C-3 D-6 E-1 F-7 H-2 I-3 J-5 K-7 Y-3 Fac.-7 Sub.-1 12名</p> <p>〔沈黙 B, G, S 3名〕</p>	<ul style="list-style-type: none"> • Dが『Fさんの提案に何か反対がありますか』と口火をきる。 • Kが『前の様に一人一人順番で話すのは意味が無いと思う。只聞くだけ、只話すだけはしたくない』と応じ、D\longleftrightarrowKのやりとりが少し続く。 • Kが『皆にも話して貰いたいと思う』と答える。 • E, I, A, C, J, が、『さっきの沈黙の時の気持』を話し、どうして沈黙になるのかがテーマになる。 • 沈黙に対する否定的な気持を語るメンバーと肯定的な気持を語るメンバーが、それぞれ自分の気持ちを話しながら、沈黙しているメンバーの気持ちを推しはかっている。(J, I, H, F, K, Y) • Yの『意見を出せる人はどんどん出して欲しいし、出せない人は徐々にで出せるようにして欲しいと思った』の発言で終了となる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 『Kさん、今話したときに非常に勇気が必要だったと思うけど、話してみてどんな感じですか』 • 『沈黙もなく話題がスムーズに流れて行くグループが、皆さんの望むグループですか』
---	--	---	--	--

表1-3 グループの経過-第3期：抗争期（沈黙・行動コミュニケーションの段階）

セッションNo.	座席状況	発言者と発言回数	グループの流れ	
			テーマの動きとメンバーの発言	ファシリテーターの発言と介入
7	<p>[輪が大きくなる]</p>	<p>A-1 H-7 J-2 Fac.-9 4名</p> <p>沈黙 B, C, D, E, F, G, I, K, S, Y, Sub. 11名</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・開始直後から20分間の沈黙が続く。 ・Hが『共通の話題を出した方が良いと思う。患者さんにどう接したらいいか、などはどうですか、Jさん』の発言で、沈黙を破り、Jとの短いやり取りがある。 ・Jと Fac. との間で、『前回の話の続きがあるかもしれないこと』へのこだわりが確認される。 ・10分程の沈黙が続き、そのまま休憩に入る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・『今の沈黙はなんですか』 ・『Hさんは話をするのに皆に断わらなければ、話にくいような感じがするのですか』 ・『ある話題の途中で時間が来たからといって、次にその続きをやらなければいけないというきまりはありません』のオリエンテーションをする ・『夕食後最初のセッションは、沈黙でというのがグループの意志の様ですね。少々疲れました』
8	<p>[最終セッションまで輪は大きいまま]</p>	<p>A-17 B-12 D-1 E-4 H-16 I-4 J-11 Fac.-36 Sub.-12 9名</p> <p>沈黙 C, F, G, K, S, Y 6名</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・Hが『しかし、わらべ歌というのはなんで作られたんでしょうか』と口火を切り、B, J, C, F, I, A, D, Eが、歌詞について批評したり、歌を口ずさんだりしながら、ポンポンと短い会話がとびかう。 ・H, A, J, と2人の Fac. のやりとりが続き、『何か話せば楽しいだろう。1時間も沈黙じゃ芸が無い、休み時間から話していた続きを持ちだした。テーマはなんでも良かった』などの気持ちが語られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・Fac. 2人から『何故わらべ歌の話題が持ちだされたのか分らない』といった意味のコメント繰返される。 ・そういった気持ちが2人には伝わっていなかった事を述べ、『分りました。どうぞ続けて下さい』とグループへ返す。

			<ul style="list-style-type: none"> • H, A, Jでわらべ歌の話題が暫く継続する。 • Jと Fac. の間でどんな気持ちで話しているかが話題となる。 • Aが『テーマを決めれば話にくくなるし、沈黙より話していた方がいいと思って一生懸命やっていれば先生たちが話を共有したいといいだす。自由にしていればまた同じ事をいわれて話せなくなる。白けてしまうしつまらなくなる。そう思いませんか、皆さん』と強い口調で自分の今の気持ちを話す。 • Iが『Hさんは自由に話したのに先生から突っ込まれた。先生のいう自由とはなんですか』、『共通するテーマなら共有出来て良いと思うが、どうですか』と Fac. へ質問する。 • Bが『ちょっといいですか』とセッション開始直後の Fac. 2人の発言についての感想を述べる。 • Bと Sub. の間で『分る』、『答えられない』のテーマが噛みあわずにやり取りされる。 	<ul style="list-style-type: none"> • Aの『教官は黙っていて欲しい』『教官と2人だけの会話になると突っ込まれて大変』、『みても可愛想だ』、『今話しているときは嫌な感じでは無い』などの、今ここでの気持ちを明確化する。 • Iへ『わらべ歌の話がみえなかったので聞いたまでです』、『テーマについては自由です』 • Sub. が自分の気持ちを述べ、Bに『分るという事はどういうことでしょうね』と質問する。 • 『ここは文化的孤島ですから、日常生活では考えられないような不自由さを味わっている。この不自由さをどうやって解決して行くかがグループ全体の課題でしょう』
9		Fac.-3 1名 沈黙 [A, B, C, D, E, F, G, H, I, J, K, S, Y, Sub.] 14名	<ul style="list-style-type: none"> • 50分の完全沈黙 	<ul style="list-style-type: none"> • 途中で休憩時間にグループの話題を持ち出す事を禁止することを伝えた以外は、開始と終了の合図をするのみ。

表1-4 グループの経過—第4期：確認期（2方向コミュニケーションの段階）

セッションNo.	座席状況	発言者と発言回数	グループの流れ	
			テーマの変化とメンバーの発言	ファシリテーターの発言と介入
10		D-4 F-3 H-10 Fac.-19 Sub.-15 5名 沈黙 A, B, C, E, G, I, J, K, S, Y, 10名	<ul style="list-style-type: none"> 10分間沈黙後、Dが『何も話さなければ楽だけどこのままでは何の進展もみられない。初心に帰って見ようと思うけど、どうしましょうか』と口火を切る。 Hが『2人の先生の発言で自分がモルモットに似ていると思った』と発言し Sub. との会話が少し続く。 Fが『先生は最初怖かった。私も Sub. と同じ様に感じた。急に先生方が輪の中に入ってきたようで戸惑っている』と発言し、Fac との会話になる。 	<ul style="list-style-type: none"> 開始の合図後、このグループで起きたことの時間外持ちだしの禁止を再確認する。 Fac. : 『ここに15人の人間がいるけど、目に見えないバリアーがあるようで虚しかった。Dさんの発言で気を取りなおした』 Sub. : 『Dさんが口火を切ってくれてホッとした。夜明けもくるのかなあと思えるようになったところです』
11		B-10 C-1 F-1 H-8 I-2 J-5 S-2 Y-2 Fac.-8 9名 沈黙 A, D, E, G, K Sub. 6名	<ul style="list-style-type: none"> 『自分はいまだにOTが良く分らない。最初のイメージがどう変わったかを皆に聞きたい』と話題を提供する。 C, F, が入学時と現在のOTに対する考え方の変化を話す。 I, B, J, とHの間でOTについてのテーマが継続される。Hが発言者へ短い質問をしたり、自分のことを述べたりしながらの会話が続く。 Bが『4人の先生にもちょっと聞きたい』と男性教官へ質問していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 『皆の中には教官も入っているんですか』と質問し、学生だけであることを確認する。 Hへ『聞きたいという話題を持ちだしたけど、何かききっぱなしという感じがするんですけど…、前にも似た感じがあったものですから…』
		D-7 H-5 J-12 Fac. 15 4名	<ul style="list-style-type: none"> Jが『さっきの続きだけど他の人にも聞きたい』と口火を切る。 Dが自分のことを話し始める。 Hが『Dさんの人間に対するみかたはどう変わったか』の質問か 	<ul style="list-style-type: none"> 3人で話しあって、お互いにどんな

12	<p>沈黙 A, B, C, E, F, G, I, K, S, Y, Sub. 11名</p>	<p>ら, J, D, H, の3者間でのやりとりが続く。</p>	<p>気持ちを相手に感じたのかを質問する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 終始沈黙していたGへ『あなたの事が気にかかっている。もしこのまま2時まであなたの気持ちをきけないと心残りがすると思う。その気持ちを今は伝えておきたい』と終了直前に話しかける。
13	<p>E-22 H-17 J-7 Fac.-20 4名</p> <p>沈黙 A, B, C, D, F, G, I, K, S, Y, Sub. 11名</p>	<ul style="list-style-type: none"> Hが『さっきの話の続きだけど、まだ言っていない人がいますね』と口火を切る。 Eが『このまま留年しなければ卒業してOTになれるのだろうけど、不安である。働くのが怖い』と発言する。Jが短い質問をする。 HとEとの間で、留年したい気持ち、したくない気持ち、働く事に対する気持ちなどが話題になる。Eが主として質問する側になる。 <p>・Jが『2人のやりとりを聞いていて、自分の質問は見当外れの事を聞いていると思った』、『でもいいかったのは……です』と、Fac. との会話になる。</p> <p>・Eは『まだ考えています……』とうつむく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 『EさんとJさんの間での話が続いているけど、なにをキャッチボールしているのか良くみえない。話の中で相手をどんなふうに理解したのかが分らないんですけど…』 『JさんもEさんに何かいいかけていたようですが…』 『EさんはJさんに何かいいたい事は無いですか』

表1-5 グループの経過—第5期：相互交流期（いま・ここでのコミュニケーションの段階）

セッション No.	座席状況	発言者と発言回数	グループの流れ	
			テーマの変化とメンバーの発言	ファシリテーターの発言と介入
14		C-7 D-1 F-3 H-7 Fac.-8 5名 沈黙 [A, B, E, G, I, J, K, S, Y, Sub. 10名]	<ul style="list-style-type: none"> • 10分の沈黙。 • Hが『思ったより時間が早く過ぎた。普段ありえない時間を過ごし忘れられないと思う。やって良かった。Dさんどう？』と沈黙を破る。 • Dが『自分の思うことはいえた様な気がする。もし皆の中で、こうしたかった、物足りない気持ちがあったら聞かして欲しい』と周囲を見る。 • Cが『Eさんの明け方の頃の話聞いていて凄く考えた。今までクラスのだれにも話して無かった事があるけど、自分の事を話して皆と深く知り合いたい……』と自分の事に付いて話し始める。 • Fが『あっという間に時間が過ぎた。やっとグループになれ、本音で話せる様になったと思う。Cさんもグループだから自分の事を話してくれたのだと思う。自分は今話したい事は特に無いが、他の人にこれからの時間に自分を表現して貰えれば良いと思う』、と発言する。 	<ul style="list-style-type: none"> • Cへ『思切って自分の事を話してみても、今どんな感じですか』
15		B-1 H-4 I-1 K-1 S-3 Y-1 Fac.-7 Sub.-1 8名 沈黙 [A, C, D, E, F, G, J, 7名]	<ul style="list-style-type: none"> • Hが『このグループに参加して感想がまだの人に聞きたい』とIへ質問。 • I：『グループが変わった。来なくて良かったとは思わない。皆と卒業してからも友達でいたい。人間はいろんな事があって苦しいけど面白いと思う』 • H：『どうしようかと迷っていた。グループもそれなりに成長したと思う。もっと言いたいことがあるような気がするけどまとまらない』 • K：『明け方の時間にだいぶ変わった。グループだから聞けた事 	<ul style="list-style-type: none"> • 『Hさん、司会をしなくっちゃという感じですか』

			<p>もあるし、自分も勇気を出して話せたことが嬉しい、今は疲れてるけど充実感を味わっている』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・S：『今嬉しかった事は、〇〇さんから目で合図があった事、言葉で言わなくても通じるものがでて来た。こんなにも沈黙が続けられるのかという自分を再認識した』 ・Y：『自分の不安定さや言葉で表現する事の大変さを実感した。自分の事は余り話せなかったけど、少しでも皆の事が分かって良かった』。 	<p>Sub.：『最初はどうかと不安で心配だった。今は本当はやってよかったな一と思う』</p> <p>Fac.：男性教官へメンバーとして参加した事について、今の気持ちを尋ねる。</p>
16		<p>B-1 G-2 H-1 J-1 K-2 Fac.-9 Sub.-2 7名</p> <p>〔沈黙 A, C, D, E, F, I, S, Y 8名〕</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・B：H, 2人の男性教官, 2人の Fac. の立場やグループでの役割について長々とコメントし、『自分は勇気を持って黙って人の話を聞くと言う事を考えていた。だいたい泣いた人がいたけど、泣いてまでと言う感じで後味が悪く嫌だった』 G：『泣かれるのは嫌だと言われたけど、自分としては泣いてスッキリした思いがある。最初の一言がいえず、順番が来るまで話し出せなかった。本当の自分を分かって欲しくなった』 ・K：『自分は何もして上げられなかったので残念な気持ちです』 ・J：『誰かが何か言うのと先生が突っ込むし、何して良いか分からなくなり途中で腹が立った。OTの話の頃から沈黙が不安でなくなり意義がある様に感じた。前半の12時間があったから、後半の12時間が良くなった』 ・H『自分の中に何とかしなければという強迫観念みたいのが有って話をすることが多かったと思う。もう一つは、何年振りかで泣いてしまった。EさんとIさんの話を聞いていて貰い泣きしてしまった。新たな自分を発見して自分自身にびっくりした。自分自身を問い詰める作業は一人では難しいなとグループを通して強く感じた』 	<ul style="list-style-type: none"> ・『いよいよ最後のセッションですね』と開始。 ・Fac.：『Gさんの話は自然で胸にスーッと入ります』 ・Sub.：『分りやすいし聞いていて涙がでてきた』 ・Fac.：『Kさん、明け方の頃のあなたのたたずまいを今思浮べていた。Gさんの話をどう感じますか』 ・Fac.：『Hさんにはとても助けて貰ったと言う感じがしています。人間の力、大勢の力はすごいなと実感出来てとても嬉しい、長い24時間マラソンを皆で完走できて良かった。それと、努力しても理解しあえない事があることも忘れないでいたい』

の発言回数は、平均6.09回であった。

①第1期の導入期では、発言者数、発言総数とも全期を通じて最も多いが、発言者一人当たりの発言回数は5.92であり、全期の平均的な値に最も近い傾向を示している。

②第2期の試行錯誤期では、発言者数は全期の中では2番目に多いが、発言者一人当たりの発言回数は4.55と少なくなっている傾向がみられた。

③第3期の抗争期では、発言者数は全期を通じて最も少なく、逆に一人当たりの平均発言回数は9.64と最も高く、少数の人が多く発言している傾向がみられた。

④第4期の確認期では、発言者数は平均的であるが、一人当たりの平均発言回数は8.86と抗争期に次いで2番目に多かった。

⑤第5期の相互交流期では、発言者数は平均よりやや少なく、発言総数は全期を通じて最も少なく、一人当たりの発言回数も3.15と最小であった。

3. 主観的な体験内容

集中的グループ経験の1ヶ月後に全員でアフターミーティングを持った。各学生の感想をきく前に教官から、5期に整理したグループの経過を、『主観的な判断で纏めてみましたが、我々が行ったグループはこの様に変化し成長していったと思われます』と、概略を板書して説明した。臨床実習を1週間後に控えているという時間的な制限もあり、グループ経験を多少なりとも知的に整理して置く事を目的とした。従って各個人の発言内容よりグループ全体の変化に重点を置いた説明を意識的に行い、『特殊なグループの経過というより、集団が形成され発展していく時にみられる共通の現象が再現されたと考えています』と、教官の判断を伝えた。

次に述べる各学生の感想は、教官の説明を聞いた上で、自由に質問や感想をいってもらった内容からの抜粋である。学生に発表内容をすべて報告するという前提でまとめた結果で有ることから、後日の利用しやすさを考慮して参加学生別に、主観的に語られた体験内容を記述的に表現した。それらを教官の司会にそった発言順に列挙する。

I学生：1週間ぐらい経つと、自分の発言したこと、自分の性格を考えて落込んだ。2週間経って他のことを考えて、グループから離れる事が出来た。日常生活では落込んでしまった。

H学生：どういうフィードバックをされるかと考えていたが、こういう形でやるとは思っていなかった。非日常的な場面で人の動きや反応をみるのかと思っていたが、今の説明ですっきりした。グループが終わってから2-3日はなんとなく気分がはれない感じがした。

J学生：今日の説明を聞いて、休み時間に話題を持ちだすとやりずらくなるからと、先生が何故言っていたかの疑問がとけた。その日は、一人で家に居てなかなか寝つかれず寂しい感じがした。翌日皆に会えて元に戻った。少し落込んでいた。

B学生：沈黙が長く続いた頃からグループが変わったと感じていたが、どう変わったか分らなかった。説明を聞いてそんなものかと驚いた。直後は、他にもやる事があって実感が湧かなかった。Jさんと夜騒いだり、少し躁状態になったり、1週間位生活が落ち着かなか

った。軽率に発言しないように戒めている。

A学生：何となくグループが変わったと感じていたことが、今ははっきりと分かった。終わった後、達成感というか、こういうことができたんだと、喜びがでて来た。いわれたことを聞き流すのではなく自分なりに受け止める様になった。

F学生：今日は何を聞かれるかと不安であった。グループの説明だったのでホッとしている。グループの経験はこれから凄く重要になると思う。直後は良く眠れなかった。凄く興奮していたかもしれない。

K学生：最初はどうかと自分でも不安だった。まとめを聞いてああそうだったのかと思っている。直後はぐっすり眠れた。貴重な時間帯だった。

E学生：2-3日は参加してよかったなーという感じだったが、時々フッとああすれば良かったとかばかり考えて居た様に思う。日常生活では特に変わったことはない。

G学生：黒板に書かれたことを見ても何も考えなかったけど、説明を聞いて、そのときの気持ちが再現して何もいえない状態だ。

C学生：今でも昨日の事のように思える。いつもは集団ということ意識していなかったけど、グループをやって集団の中の一人だと実感出来た。家族で何かあっても、自分がいけなかったのかと考えるようになった。

D学生：今から考えると恥かしい事ばかり言ったのではないかと考えて来た。今日は一人一人の性格とかを分析されるのではないかとと思っていた。あれから自分のことを良く考える様になった。自分は意見を言ったり、人の話を聞くことは出来るけど、グループの中で皆を引張って行くことは出来ないと思う。

4. 自己評価からみた集中的グループ経験の個人に及ぼす影響

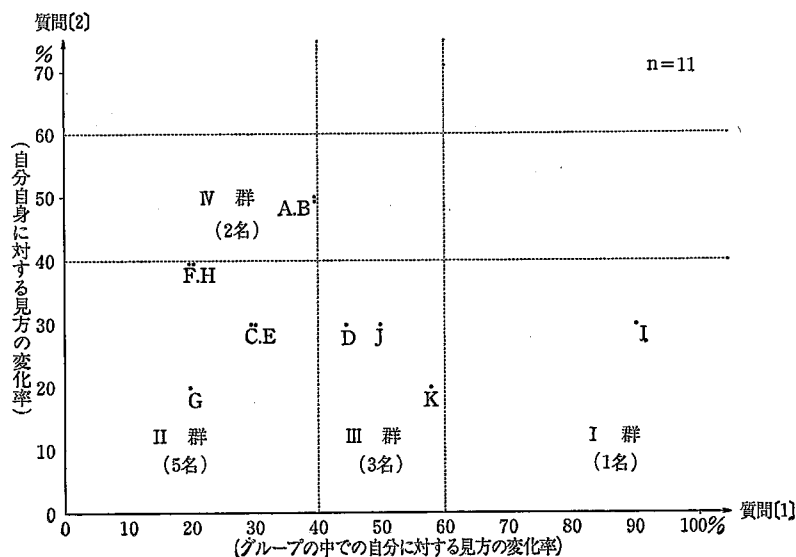


図4 セミナー参加前後の変化率

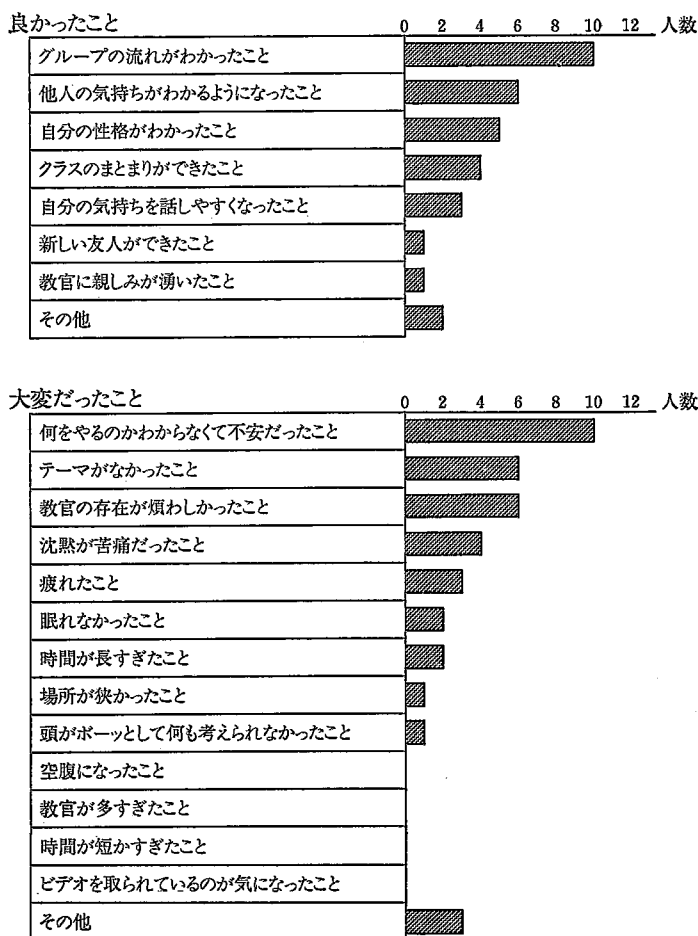


図5 良かったこと及び大変だったことの選択内容

アンケート調査では集団における自己の行動や態度を学生自身が自己点検するてがかりを得るために、まず、集団の中の自分について集中的グループ経験をする前後を比較しながら10項目の自己評価をして貰った(質問1)。次いでグループとは切り離して自己自身に対する見方が、今回の集団経験を持った前後で変化したか否かをやはり10項目について自己評価して貰った(質問2)、この両者の変化の有無と、実際にグループの中で行動した自分とを関連させて理解する為の資料として、調査の結果を次の様な手続きで整理した(脚注1)。

①変化の方向や程度は問わず、プロフィール上の位置のズレはすべて変化と見なした。

②質問1—グループの中での自分、質問2—自分に対する見方の両者とも変化のあった項目数の、全回答項目数に対する比率を、変化率として個人別に算出した。

③質問1、質問2の両者とも、変化率60%以上を変化あり、40%以下は変化なし、40—60%はどちら

脚注1) 本研究では、集団が個人に及ぼす影響を問題にしていることから、各個人の変化の方向、内容に付いては分析の対象から除外した。

ともいえないと見なし、プロフィールの変化を3段階に分類した。

質問1と質問2に現れた変化の有無の組合せは、9種類の組合せが考えられるが、実際には、学生の自己評価からみた集団の個人に対する影響の有無は次の4群に区別できた(図4)。

I群：集団の中での自分にたいする見方は変化した、自分自身にたいする見方は変化しなかった。(1名—I学生)

II群：集団の中での自分にたいする見方も、自分自身にたいする見方も変化しなかった。(5名—C, E, F, G, H学生)

III群—集団の中での自分にたいする見方は変化したかどうかはどちらともいえないが、自分にたいする見方は変化しなかった。(3名—D, J, K学生)

IV群：集団の中での自分にたいする見方は変化しなかったが、自分自身にたいする見方が変化したかどうかはどちらともいえない。(2名—A, B学生)

5. 集中的グループ経験に参加した感想

アンケートの中で自由選択してもらった、参加学生の一般的な感想は図5に示した。参加して良かったことは、①グループの流れがわかった事、②他人の気持ちが分る様になった事、③自分の性格が分る様になったことが上位に選択された項目であった。

又、大変だった事は、①何をやるのか分らなくて大変だった事、②テーマがなかった事。③教官の存在が煩わしかった事、の3項目が上位に選択されていた。

後輩にこの様なグループを行った方が良いかどうかの質問に対して、10名が肯定的に答え、1名が分らないと回答した。

IV 考 察

1. グループの発展段階について

集団がどのように変化して行くかの見方には大別して2つの見方が有ると思われる。一つは、集団の構成員である個人の成長発達に焦点を当てた見方であり、エンカウンターグループの創始者であるロジャース⁴⁾の考え方が基本的には反映されている。ロジャースはカウンセリングで生じる個人の変容過程を集団のなかの個人の変容過程に応用し、感情と個人、個人の意味づけ、体験の仕方、自己の不一致度(理想と現実、行動と思想、感情と理性)、自己の伝達体験の構成、問題に対する関係、他者との関係のしかた、などに着目しながらグループの発展段階を低いレベルから高いレベルへと7段階にわけている。どちらかといえば、個人の発達を集団の発達より重視する立場といえよう。

もうひとつは、集団を構成する個々人の発達より、集団そのものがある目標達成に向かってどのように発達していくかを重視する立場である。ここでは個人は、集団を変化させる一つの重要な因子としての存在であり、集団の中のどのような問題を解決することが集団の変化につながるかという点から、個人の変容過程を重視する立場といえよう。

後者の立場にたつベニスは、Tグループの持つ機能を、情緒的様相、話題、主導的役割（中心的人物）、集団構造、集団活動の5つの側面に分けている^{6,13)}。このグループの構成メンバーは、権威に対する依存とメンバーに対する依存という二つの領域での問題を解決していくとしている。その結果として、集団は権威に対する依存と逃避（第1段階）、反抗と闘争（第2段階）、解決とカタルシス（第3段階）、のプロセスを経て、メンバーとの相互依存のプロセスである、恍惚状態と逃避（第4段階）、覚醒状態と闘争（第5段階）、合意による確認（第6段階）、へと、6段階の発展をするとしている。

村山・野島⁸⁾は個々人の変容過程、及び集団の持つ対人交流の機能が、どのように変化するかという点からエンカウンター・グループプロセスを報告しているが、これはいわば両者の考え方を折衷したものであり、応用しやすさの点で極めて実践的な見方ともいえる。彼等は、メンバー個人の動き、ファシリテーターの動き、相互作用のレベル、グループ形成のレベルの4点に焦点をあてて記述し、次のような6段階に区別している：

段階1は当惑・模索であり、ファシリテーターによる場面構成後の戸惑い、困惑、不安などの時期。

段階2はグループの目的・同一性の模索であり、場つなぎ的に次から次へと話題を追う時期。

段階3は否定的感情の表明であり、グループの中の目立つ人、ファシリテーター、グループの性質について不満、攻撃、不信など否定的感情が爆発する時期。

段階4は相互信頼の発展であり、グループのまとまりができ、信頼感、親密感、他者への配慮が高まる時期。

段階5は親密感の確立であり、重要な自己の内面は語られないが、情緒表現が豊かになり親密感が深まる時期。

段階6は深い相互関係と自己直面であり、here and nowに基づいた率直な自己表明、正直な他者への応答、フィードバック、対決等いろいろな試みや挑戦がおこなわれる時期。

今回我々が実施した集中的グループ経験に対する考え方は、基本的には村山・野島の立場に近いものである。どのようなグループ経験であれ、集団の中の個々人の変容過程と集団そのものの変化の両面を同時にみていくことが、グループダイナミックスの実際的な理解には不可欠であると考えたからである。しかしながら、学生の理解のしやすさを考えると、まずは、行動として見えやすい言語的コミュニケーションを集団の主たる機能として取りあげるのが、教材としては利用しやすいだろうと考え、結果的に、今回の集中的グループ経験の経過を5段階に区別することが出来た。

村山らの記述した発展段階と比較してみると、第1期の導入期にみられた形式的コミュニケーション段階は、段階1の当惑・模索の時期に類似している。初対面のメンバーの出会いから開始される通常のエンカウンター・グループと比較すると、同じクラスである事、ファシリテーターともなじみがある事、場所もいつも利用している事、などの理由からファシリテーターによる場面構成後の戸惑いや不安などは表面的にはみえにくい。しかし、

全期を通して発言者数、発言総数が最も多いことを考えると、知っている者同志故におしゃべりになることで、集団への導入期にみられる困惑や不安に対処していたともいえる。

第2期の試行錯誤期にみられたすれ違いコミュニケーションの段階は、段階2のグループの目的・同一性の模索と類似している。第1期の後半からすでにグループの目的や意義が質問として出始めており、2期の中間からは沈黙をどうするかで様々な試みがなされるが、発言者数が多い割には一人当たりの発言回数は少なくなっており、発言が噛みあわず沈黙になるといったすれちがいコミュニケーションがみられている。

第3期の抗争期にみられた沈黙・行動化コミュニケーションの段階は、段階3の否定的感情の表明に酷似している。否定的な感情を言語で表現出来ずに、休み時間の話題をそのままグループ場面へ持込んだり、歌を口ずさんだりといった行動化で表現したり、ファシリテーターへの不満をぶつけたり、休み時間への持出しを禁止されて、完全沈黙になったり、言語あるいは行動を通して否定的な感情を表現していたと思われる。この期の発言総数は全期を通じて最も多いか最も少ないかのどちらかであること、又少数の発言者による発言回数が全期間を通じて最も多い事が特徴的である。このことは、第3期の抗争期の発言者数が最低で平均発言回数が最高であること及び第8セッションでは最高の発言総数であるが、第9セッションでは発言総数が最少の3回となっていることから支持されられると思われる。いわばグループが“荒れている”状況であり、集団そのものが内部分裂するかどうかの危機に直面した状況ともいえる。

第4期の確認期にみられた2方向コミュニケーションの段階も、段階4の相互信頼の発展に酷似している。グループのまとまりが出来、沈黙している人への配慮など、他者への関心や気配りが生じてきている。発言者数が平均値に近く、しかも一人当たりの発言回数が多いという特徴は、共通の話題が送り手と受けての2者間に確認されながら進行するという、2方向のコミュニケーションが成立し始めた為と思われる。

段階5の親密感の確立は、この結果の報告には含まなかったが、自由時間に持たれた4時間のセッションが該当すると思われる。自分の私生活の事を話したり、黙って聞いている人が貰い泣きをしたり、話したくても話せない気持ちをポツリポツリと話す場面もみられた。自由時間の持つ解放感が参加メンバーの情緒的交流を深め、発言者数、総発言数が少ないにもかかわらず、多方向のコミュニケーションが成立し始めた為と思われる。

第5期の相互交流期の今・ここでのコミュニケーションの段階は、段階6の深い相互関係と自己直面とほぼ同じとみて良いと思われる。その場で感じた気持ちを率直に他者に伝えたり、本音で他者へ応答したり、今まで気がつかなかった自己と直面したり、一言で言えば、より内面的な相互交流が成立したと思われる。発言者数は平均よりやや少ない程度であるが、発言総数、一人当たりの発言回数は、全期を通じて最も少ない。いわばグループの中では“言わなくても分る”コミュニケーションが成立したといえよう。

以上、村山らの記述したエンカウンター・グループ・プロセスの6段階と我々の実施した集中的グループ経験の5期に区別した流れを比較してみると、実施形態や実施方法は異なるにしても、極めて類似したグループの発展段階がみられたと結論づけても差支えない

と思われる。従って、われわれの実施した集中的グループ経験は、様々なグループに共通する現象を理解しやすいということから、作業療法教育におけるグループダイナミックスの学習に利用出来ると思われる。また、このことは、この様なグループ経験の継続を学生が肯定的に評価している（11名中10名）ことから支持されよう。

しかしながら、今回は考察の対象から省いたが、集団の個人に及ぼす影響を体験的に学習する為には、この集中的グループ経験に対する参加者全員の相互フィードバックをどのように実施するかが今後の残された課題として挙げられる。村山¹⁰⁾はグループ過程のフィードバックは、①集団の相互作用の複雑さの明確化、②グループの成熟度の向上、③参加者全員の相互啓発・理解、④グループの臨床家の訓練過程の為に必要であるとして、プロセスフィードバック法を開発している。又、山口・松井¹⁷⁾もグループ体験をフィードバックすることは、①グループの場における個々のメンバーの理解、②ファシリテーターとしての自己の吟味、③グループ過程の検討、などに不可欠な作業であるとしてフィードバックミーティングの構造とその意義について報告している。

われわれの場合も、アフターミーティングで語られた学生の主観的体験内容、アンケート調査から得られた自己評価の結果、ビデオフィルム、この報告論文、などの資料を利用したフィードバックミーティングを実施した後に、作業療法教育における集中的グループ経験の利用法を総合的に検討することが必要と思われる。

<別表>

グループダイナミックスセミナーについてのアンケート

グループダイナミックスセミナーが終わって3ヶ月が経過しましたが、学生諸君は無事に実習が終了し、ホッとしているところだと思います。

実習が終わったばかりで、また頭を使わせるのは恐縮ですが、以下の質問に対し、現在のあなたの気持ちと、セミナー参加前のあなたの気持ちとを素直に答えて下さい。

なお、この資料は、来年度以降の信州大学医療技術短期大学部作業療法学科の学生に対し、教育効果を高める為に活用する目的です。

[1] グループの中での自分について以下の質問に答えて下さい。なお、参加前の気持ちを△で、現在の気持ちを○で以下の線上に示して下さい。

記入方法
 0：どちらでもない
 +：そう思う
 ++：かなりそう思う

- | | | | |
|----|----------------------|---------------------------------|-----------------------|
| 1 | 自分の問題を中心に考えると思う。 | ++ + 0 + ++ | 他人の問題を中心に考えると思う。 |
| 2 | 断定的な発言をすることと思う。 | ----- | 一つの意見として述べることと思う。 |
| 3 | 他人の言うことに耳をかきないと思う。 | ----- | 他人の言うことに耳を傾けると思う。 |
| 4 | リーダーシップをとることがあると思う。 | ----- | 他人に花を持たせられると思う。 |
| 5 | キマジメすぎることと思う。 | ----- | ユーモアがあると思う。 |
| 6 | 非難されると不愉快になると思う。 | ----- | 非難されると恐縮することと思う。 |
| 7 | 喋りすぎることと思う。 | ----- | 適度に喋ることと思う。 |
| 8 | 人前で喋るのが苦手だと思う。 | ----- | 人前で喋るのが苦にならない。 |
| 9 | 「私は……」という発言形式をとると思う。 | ----- | 「我々は……」という発言形式をとると思う。 |
| 10 | 他人の意見に反対しなくなる人が多い。 | ----- | 他人の意見に賛成しなくなる人が多い。 |

[2] 自分自身に対する見かたの変化について以下の質問に答えて下さい。なお、参加前の気持ちを△で、現在の気持ちを○で示して下さい。

参考文献

- 1) Bion, Wilfred R., *Experiences in Groups*, Tavistock publications, 1961 (邦訳: 対馬忠訳, *グループ・アプローチ—集団力学と集団心理療法*, 1973, サイマル出版会)
- 2) Cartwright, D., & Zander, Alvin., *Group Dynamics Research and Theory*, Tavistock Publications, Harper & Row, Publishers, 1960 (邦訳: 三隅二不二, 佐々木薫訳編, *グループダイナミックス I, II*, 1984, 誠信書房)
- 3) Marrow, Alfred J., *The Practical Theorist. —The Life and Work of Kurt Levin*, 1969, Basic Books, Inc. N. Y. (邦訳: 望月 衛, 宇津木保訳, *クルト レヴィン—その生涯と業績*, 1972, 誠信書房)
- 4) Rogers, Carl R., *CARL ROGERS ON ENCOUNTER GROUPS*, Harper & Row Publishers, Inc., 1970 (邦訳: 島瀬 稔, 島瀬直子訳, *エンカウンターグループ—人間信頼の原点を求めて*, ダイアモンド社, 1975)
- 5) 同上, *PLAY THERAPY, GROUP THERAPY AND GROUP ADMINISTRATION*, (邦訳: 島瀬 稔編訳, *プレイセラピー・グループセラピー・集団管理*, 岩崎学術出版社, 1973)
- 6) Schein, Edgar H., & Bennis, Warren G., *Personal and Organizational Change Through Group Methods.*, John Wiley and Sons Inc., New York, 1965 (邦訳: 伊東博編訳, *T—グループの実際—人間と組織の変革 I—サイコセラピーシリーズ 1*, 岩崎学術出版社, 1969)
- 7) Shepard, Martin & Majorie Lee, *Marathon 16*. (邦訳: 石川弘義訳: *裸の16時間 集団/心理実験レポート*, 日本リーダーズダイジェスト社, 1973)
- 8) 村山正治・野島一彦, *エンカウンタープロセスの発展段階*, 九州大学教育学部紀要 21, 77-84 1977
- 9) 村山正治他, *日本における集中的グループ経験の展望*, 実験社会心理学研究 Vol. 18, No. 2., 139-151, 1979
- 10) 村山正治, *プロセスフィードバック法の開発*, 九州大学教育学部紀要, 第26巻第1号, 131-140, 1981
- 11) 岡堂哲雄, *グループ・ダイナミックス*, 現代のエスプリ, No. 131. 至文堂, 1978
- 12) 同上, *集団力学入門—人間関係の理解の為に*, 医学書院, 1974
- 13) 関 計夫, *感受性訓練—人間関係改善の基礎*, 誠信書房, 1965
- 14) 同上, *統感受性訓練*, 誠信書房, 1976
- 15) 山口勝弘, 松井紀和, *集中的グループ経験における Non Verbal Communication の研究(1)—グループ過程の行動学的研究—*, 山梨大学教育学部研究報告, 第30号, 142-150, 1979
- 16) 同上, *集中的グループ経験における非言語的コミュニケーションの行動学的研究*, 第44回日本心理学大会発表論文集, p. 643, 1980
- 17) 同上, *集中的グループ経験における Non Verbal Communication の研究(Ⅲ)—フィードバックミーティングの構造とその意義—*山梨大学教育学部研究報告, 第34号, 162-171, 1983

(1985年9月30日 受付)